

## シンポジウムを終えて

大東文化大学法学部教授 東 田 親 司

二人の基調講演者を含めて四人のパネリストのご協力、後援をして頂いた地元自治体である板橋区のご配慮、そして政治学科の諸先生のご支援により、シンポジウムを終えることができました。担当した者としてあらためて心よりお礼申し上げます。

このテーマを選んだ趣旨は文中にもあるように、公務員志望の学生に何のために公務員になるのかを考えて欲しいと思ったからです。

それが、公務員を経験した私の学生に対する義務のような気持ちから発していることは確かです。はっきり言えば、役所時代に多くのすばらしい公務員像をみましたが、逆にこの人は何のために公務を職業に選んだのか、安定した給料を貰うためだけであれば他にも仕事はあったのではないかと、と思われるような人も少なくなかったのは確かです。

公務員志望の学生の多くが、何故志望するかと聞かれて、そうした人たちと同じような答えしか持っていない現状をみて、公共のために尽力することのすばらしさやマスコミから批判的に取り上げられる公務員像ではない公務員の姿を自分の手で追求して欲しいと思ったことがシンポジウムを企画した背景といえます。おそらく元公務員の青山様、現職公務員の細野様をはじめご参加いただいたパネリストの方々も同じような気持ちを持っていたからこそ、快く引き受けて下さったのだらうと思います。本当にありがとうございます。

後日談があります。このシンポジウムを傍聴した学生が、ある日、パネリストの斎藤様の活動の舞台である公園を見に行ったそうです。その時、偶然に代表らしい年配の男性が仕事をしておられてこういうふうに言ったそうです。

「こういう小さな修理でも役所に頼むと時間がかかる。私達ならお金をかけずにすぐに直せる。しかも年寄り喜んで仕事をするんだよ。」

これからの行政の方向として必要な、住民の参加と協働、迅速さ、コスト削減、高齢者の生きがい対策などがすべて凝縮されているような発言であるように私は感じ、報告してくれた学生に教わった感じがしました。

成果志向、顧客主義、住民の参加と協働など、地方行政のあり方について、New Public Management と呼ばれる流れが多くの自治体の共感をえており、また学問の世界でも研究されていますが、そんなに難しいことではなく、「けやきの公園」をつくり維持管理しているしくみのように身近な行政サービスを住民の視点から見直すことだろうと思います。

あらためてシンポジウムを振り返ってみて、これからの公務のあり方について、少しは示唆するところがあったのではないかと自賛しつつ、学生諸君の公務員志望の動機を自分なりに考え直すひとつのきっかけになれば幸いだと思っている次第です。